

【会議報告】



会議報告

◆ VRAIS'98 参加報告

佐藤清秀

(エム・アール・システム研究所)

(News letter Vol.3, No.3)

3月14日から18日の5日間にわたって開催された、VRAIS'98 (Virtual Reality Annual International Symposium) に参加した。今回の開催地はアメリカ南東部の都市アトランタで、会議はダウンタウンの外れに位置する Sheraton Colony Square ホテルにて行われた。前半の2日間で6つのチュートリアルと1つのワークショップが、後半の3日間で本会議が行われた。本会議は全てシングルセッションであり、計36件の論文が9つのセッションで発表された。内訳は、アメリカの15件が最多で、以下、日本8件、ドイツ4件、カナダ3件、イギリス2件、フランス、オランダ、シンガポール、中国が各1件であった。論文の投稿総数は93件(昨年より45%増加)で、採択率は39%であった。また、1件の招待講演、3件のパネルセッション、4件のポスターセッション、Georgia工科大学の見学ツアーが行われた。さらに今回も Video Proceedings が配付された。プログラムの詳細と各論文の概要は、VRAIS'98のホームページ(<http://tularosa.eece.unm.edu/eece/conf/vrais>)にて見ることができる。

ワークショップは、"Interfaces for Wearable Computers"と題して3月15日に行われた。参加者は60名程であった。当日の配付資料等は何もなく、参加者には事前にメールで「ホームページ(<http://www.hitl.washington.edu/people/grof/VRAIS98/home.html>)をチェックして予習しておくように」との通達が流れていた。午前中に8件の発表が行われ、午後はディスカッションが中心であった。OrganizerのT.Starmerを始め、発表者の半数がWearableな出で立ちで登場し、会場は異様な熱気にあふれていた。日本にももうすぐWearableのブームが来るのではないだろうか。

本会場の広さは座席数にして約300席であり、聴衆の数は座席の2/3が埋まる程であった。会議の冒頭で、

General ChairであるL.Hodgesにより、VRAISの「読み方」についての講釈があった。報告者はこれを"Vray (プレイ)"と読んでいるが、"Vee Rays"、"Vee Ray"、"Ver Rass"など、人によって様々な呼び方があるようである。招待講演では、工技院機械技術研の谷江和雄教授が、ヒューマノイドロボットやテレプレゼンスの最新の研究動向を紹介しながら、ロボット工学とバーチャルリアリティの関連性について述べた。続く一般セッションでは、日本からの発表が多かったことが印象に残った。特に触覚と力覚のセッションでは8件中5件が日本からの発表であった。また、日本からの発表のうちの5件は昨年秋のVR学会第2回大会で発表されたものか、それに関連する研究であった。全体の傾向としては、ヒューマンファクタに関連する報告が7件と多く、それに次いで、システムや、image-based renderingに関連する報告が多かった。また、南カルフォルニア大のU.Neumannらが、augmented realityに関する研究を3件(うち1件はポスター)発表していたのも目立っていた。一方、表示装置やセンサデバイスに関する報告はほとんど見られなかった。

なお、本会議は来年度より主催がIEEE Computer Society Technical Committee on Computer Graphicsのみになり、名称をIEEE Virtual Realityと改める事になった。来年度(略称VR'99)は、平成11年3月13日から17日の5日間にわたって、ヒューストンで開催される。論文のメ切は、VR学会第3回大会直後の9月1日である。また、2000年はニュージャージーで、2001年は日本での開催が計画されている。

◆ Ars Electronica '97 参加報告

岩田洋夫

(筑波大学)

(News letter Vol.2, No.10)

アルスエレクトロニカとは、オーストリアのリンツで毎年行われるメディアアートの国際美術展である。例年9